

鳥取県八頭郡若桜町方言における 身体感覚を表すオノマトペ

黒崎 良昭
神部 宏泰

はじめに

1. 調査対象地：鳥取県八頭郡若桜町小舟（オブネ）・中原（ナカワラ）
若桜町は鳥取県の東の端にあり、鳥取市から南へ約30キロ、戸倉峠を隔てて兵庫県に接している。「清流と杉の町」のキャッチフレーズどおり、川沿いに開けた農林業の町である。小舟、中原は戸倉峠の入口に位置し、ともに国道29号線に沿った村落である。小舟は戸数約60、中原は約30という小集落で、両者は2キロ隔てて隣接している。言語環境はほぼ同じと考えられる。
2. 調査年月日：平成3年11月4日
3. 話者：小舟 …… 石本徳江（大正14年6月生まれ、66歳）
中原 …… 永原久代（大正12年9月生まれ、68歳）
4. 調査者・調査場所：黒崎良昭、話者自宅近くの道端
5. 調査方法・調査時の様子：調査用紙をもとに一問一答形式で進めた。調査者にとって、若桜町は初めて訪れる地であったが、二人とも使用例をあれこれ考えて答えるなど、親切に根気よく応じてくれた。

I 全身の感覚

1-1. 快不快

サッパリ・スッキリ（→する）快感

〇エー ヌダッタ ナー。フロニ イッテ サッパリ シタ ワー。（いい湯だったなあ。風呂に入ってさっぱりしたよ。）

話者は“「サッパリスル」は、どちらかというとなりごとで、主に若い人が使う。

「スッキリスル」は、掃除をしてきれいになった時にも使う。”と内省している。

1-2. 寒さ

ガタガタ（→ふるえる）寒さ

〇サムーテ カラダガ ガタガタ フルッタ デー。（寒くて体ががたがたふるえたよ。）

ゾクゾク・スースー（→する）寒気

〇サムケガ シテ ゾクゾク スル ワ。（寒気がしてぞくぞくするよ。）

○シエナカガ サムーテ スーソー シテ ハダニ キトル モンガ ミニ ツカン
ワ。 (背中が寒くてすうすうして、肌に着ているものが身につかないよ。)

1-3. 熱さ

ホカホカ (→ する) 火照り

○<酒を飲んだら>ホカホカ シテ カオガ ホテツトル ワイ。 (ほかほかして顔ほてっているよ。)

若い人は「カッカスル」を使うこともある —— と内省する。

II 皮膚の感覚

ヒリヒリ (→ する) 日焼け・火傷・切傷

○<日焼けして>ハダガ ヒリヒリ シテ カナワン ワ。 (肌がひりひりしてかなわないよ。)

ズキズキ・ズキンズキン (→ する) 化膿傷・歯痛・頭痛

○ズキズキ シテ イターテ ネレナダ。 ウミョールダラー ヤー。 (ずきずきして痛くて寝られなかった。膿んでいるのだろうよ。)

○ハオ ヌイタ アトガ イトーテ ズキンズキン スル ダガ。 (歯を抜いた後が痛くてずきんずきんするよ。)

ベトベト・ベタバタ・ジトジト・ジタジタ (→ する) 汗ばむさま

○<汗をかいて>ベトベト シカケタ デー。 (べとべとしてきたよ。)

ムズムズ・モゾモゾ・グジャグジャ (→ する) 衣類の下で虫・異物の動くさま

○ナンダー モゾモゾ ムシダカ ハヨール。 (何だか、もぞもぞ虫か何かが這っている。)

○カンゲーガ ハイツトルダカ ナンダー グジャグジャ シテ カナワンケー チヨット ミデー。 (髪の毛が入っているのか、何だかむずむずしてかなわないからちょっと見てちょうだい。)

「グジャグジャ」は、虫の動く場合には用いない。

カサカサ・ガサガサ (→ する) 肌の乾燥 (特に手の荒れたさま)

○テガ カサカサ シテ イケン ナー。 (手がかさかさして困るねえ。)

○テニ モサラガ デキテ ガサガサ ショール。 (手に逆むけができてがさがさしている。)

ツルツル・スベスベ (→ する) 肌の滑らかなさま

○<温泉に入ったら>スベスベ シテ キモチガ エー ワ。 (すべすべして気持ちがいいよ。)

「ツルツル」のほうが普通。「スベスベ」は若い人のことばである。

III 頭部の感覚

3-1. 頭

ズキズキ・ズキンズキン・ガンガン (→する) 頭痛

○ケサカラ カジエ ヒータダカ アタマガ イターテ ズキンズキン シテ ヨー。

(今朝から風邪をひいたのか、頭が痛くてずきんずきんしてねえ。)

同様の場合、「ズキズキ」も使うが、「ズキンズキン」に比べて、痛みの程度が軽い。「主人<老男>はよく「ガンガンスル」を使う」とも報じている。

フカフカ・フラフラ (→する) 発熱

○アタマガ フカフカ シテ ナンカ オカシー テ。(＜熱が出て＞頭がふらふらして何かおかしいよ。)

3-2. 顔面

ワッカ (→する) 顔がほてるさま

「ワッカスル」は若い人が使う。また、腹がたった時の形容でもある——とも言う。老人は、恥ずかしい場合に、次のようにも言う。

○ハズカシーテ カオガ ホタル。(恥ずかしくて顔がほてる。)

「ホタル」は「ホテル」とも言う。

3-3. 目

チカチカ (→する) 疲労

テレビを長時間見過ぎた場合などには「チカチカスル」とも言うが、どちらかというとき若い人のことばである。

ショボショボ・クジャクシャ (→する) 視力減退(老眼)による疲労

○メガ ショボショボ シテ ミニクー ナッタ テ。(目がしょぼしょぼして見にくくなったよ。)

老人に多い言いかたである。

ゴロゴロ・コロコロ (→する) 異物が入ったさま

○<目にごみがいって>コロコロ スル。(ころころする。)

3-4. 耳

ジンジン (→する) 強烈な音を聞いた後のさま

理解語に近い言いかた。騒音を耳にした時は、「キガ ワリー」と言うのが一般のようである。ただし、耳鳴りのするような場合は、「ジンジンスル」と言うことがあると報じている。

ツクツク・ズクズク (→する) 耳だれのするさま

○ミミダレガ ショールテ ズクズク スル。(耳だれがしているので、じくじくする。)

3-5. 鼻

ムズムズ・グズグズ (→する) むずかゆいさま

「ムズムズスル」は、くしゃみの前など、鼻汁が出るなどして、むずかゆい場合は

次のように言う。

○ハナガ グズグズ スル。(鼻がむずむずする。)

ツント・ツント (→する) 刺激の強いさま

○キョーノ サシミワ ワサビガ チョット ヨケースギテ ハナガ ツント スル
デー。(今日の刺身はわさびがちょっと多すぎて、鼻がつんとするよ。)

鼻をかみすぎた場合も同様に「ツントスル」と言う。

3-6. 口

(口全体)

ネチャネチャ・ネチネチ・ネバナバ (→する) 粘るさま

甘いものを食べすぎて口の中が甘ったるい場合は、オノマトペを使わず、「ネツッ
コイ」「サッパリセン」「アマタラシー」などと表現する。

スイット (→する) 梅干しを食べた時のさま

(歯)

ガチガチ・カチカチ・ガクガク (→する) 寒さで歯が鳴るさま

「ガチガチスル」が普通の言いかたである。

ズキズキ<ズキズキ>・ズキンズキン (→する) 歯痛

○イチバン オクノ ハガ ハレトルダカ マー ハガ ズキズキ シテ ナンニモ
カメン ワ。(いちばん奥の歯<莖>が腫れているのか、まあ歯がずきずきして何
もかめないよ。)

(舌)

ヒリヒリ・ピリピリ (→する) 強い刺激

○キョーノ ヒルゴハンニ カレーオ シタラ マー カラーテ ヒリヒリ シテ
カナワン ワ。(今日の昼ご飯にカレーをしたら、まあ、辛くてひりひりしてたま
らないよ。)

3-7. 喉

カラカラ (→する) 乾いたさま

○ノドガ カワイテ カラカラ シトッテ ミスデモ ノマナ イケン ガー。(喉
が乾いてからからして、水でも飲まないといけないよ。)

イガイガ (→する) 強い刺激(いがらっぽいさま)

○クキオ ニーテ クッタラ イガイガ シテ エグイケー ナ。ハシカイ ワ。
(<里芋の>莖を煮て食べたら、いがいがして<喉が>いがらっぽいからね。か
ゆいよ。)

ジェージェー (→する) 息の切れるさま

○<急いなので>ノドガ ジェージェー スル ワー。(喉がじえいじえい言うよ。)

IV 胴体の感覚

4-1. 肩

「肩がこりこりする」とは言わず「カタガ イテアー」(肩が痛い)などと言う。

4-2. 胸

ドキドキ・ドクドク (→する) 驚き

○ゴツツイ オトロシカッタ。ムネガ ドキドキ シタ。(すごく恐ろしかった。胸がどきどきした。)

「ドキドキ」は「胸が……」、「ドクドク」は「心臓が……」と言い分ける。

キューット (→する) 締めつけられるさま

○カナシューテ カナシューテ ムネガ キューット シテ オモイキリ ニヤータワ。(悲しくて悲しくて胸がきゅっと締めつけられて、思いきり泣いたわ。)

ムカムカ (→する) 吐き気

○オバーサンガ ニーテ オクレタケド ムカッタラ ムカムカ シテ クエンワ。(悪阻の時、塩漬を>おばあさんが煮て下さったけれど、前にしたらむかむかして食べられないよ。)

4-3. 腹

(空腹)

ゲーゲー (→言う) 空腹

○ハラガ ヘッテ ゲーゲー ユーワ。(腹がへってぐうぐう鳴るよ。)

(満腹)

チャポチャポ・ポチャポチャ・ゲブゲブ (→言う・する) 水・茶の満腹

○キョーワ ヒル アツカッタ モンダケ ムギチャ ヨーケ ノミスギタラ ハラガ チャポチャポ スルワ。(今日は昼間暑かったものだから麦茶をたくさん飲みすぎたら、腹がちゃぽちゃぽ言うよ。)

パンパンダ<~ニ ナル> 満腹

○ツイ クイスギタラ ハラガ パンパンニ ナッテ エリヤーワ。(つい食べすぎたら腹がぱんぱんになってつらいよ。)

(腹下し)

ゴロゴロ・ピーピー (→する・言う) 腹痛・下痢

○ショクアタリオ シタダカ ハラガ ゴロゴロ シテ キモチガ ワリーワ。(食あたりをしたのか、腹がごろごろ言って気持ちが悪いよ。)

「ゴロゴロ」のほうがよく使われる。

4-4. 胃

シクシク・チクチク・キリキリ (→する) 胃痛

○イガ ワルー ナッタダカ ナンダカ シクシク スル ナー。(胃が悪くなったのか、何だかしくしくするなあ。)

「キリキリスル」は痛みが強い場合に用いるが、そういう機会が希なためか、耳にすることは少ない。「シクシク」と同様に「チクチク」もよく用いる。

4-5. 尻

ムズムズ (→ する) かゆいさま

V 手足の感覚

(手)

ブルブル (→ ふるえる) ふるえるさま

○テガ ブルブル フルエテ ハシガ モテンヤニ ナツテ ゴハンオ クーノガ
タバニクー ナツタ ガヨー。(手がふるふるふるえて、箸が持てないようになって、ご飯が食べにくくなったよ。)

(足)

ガクガク (→ する) 関節疲労

(その他)

ヌルヌル・ヌルツ (→ する) ねばく滑らかなさま

VI 関節(骨)の感覚

ポキポキ (→ 言う) 骨の鳴るさま

首の関節がおかしい場合は、特にオノマトペを用いることなく、

○ネタガッタカ クビガ イテアー ガヨー。(寝違ったのか首が痛いよ。)

のように言う。指の関節を折って音を出す場合、「ポキポキ鳴らす」などと言うこともあるが、若い人に多い。

VII おわりに

当方言のオノマトペは、共通語のそれに近く、全般に、特にとりたてるほどの地方性は薄いと言ってよい。身体語彙が国語の生活基礎語彙とすれば、これにかかわるオノマトペも、発想に、類同性を帯びがちなのであろう。

ここに見られるオノマトペは、概して「～する」の形態をとるものが多い。特定の状態・感覚を、象徴的直接的にとらえた、いわば、いっそう感覚的な言い表しかたになっていよう。注意されるのは、例えば、「腹がゴロゴロスル」「腹がチャポチャポスル」「息がジェージェースル」「歯がカチカチスル」など、擬音性のももの「～する」の形態をとっていることである。この形態に収斂される、感覚的発想の強さを指摘することができよう。

以上の単純作業をもってしても、国語のオノマトペの豊かな世界をかいまみることが容易である。

<付記>本稿は、黒崎が調査および元記述を担当し、神部がこれに若干の修訂を加えて成ったものである。

(くろさきよしあき 兵庫県立社高等学校・かんべひろやす 兵庫教育大学)